

沖藤典子

銀の園

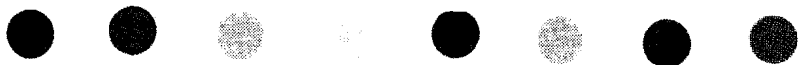
ちちははの群像

新潮社版



# 銀の園・ちちははの群像

沖藤典子



新潮社版

銀の園・ちちははの群像

昭和五十七年一月五日印刷

昭和五十七年一月一日発行

著者 沖藤典子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一一一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 九五〇円



© 1982, Noriko Okifuji  
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り）  
（下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

銀の園・ちちははの群像 目次

1 老人と家族、その人間模様……………7

もつれた糸 親孝行と親不孝 罪の意識と面会

片道切符 傷ついた自尊心

2 汗のシズクロード……………72

勇気ある苦言 風呂は極楽

生命への欲求 生きているあかし 寮母たち

3 愛を求めて……………137

かゆいところ ナースコールはラブコール

慕情とマドンナ

4 生きる手ごたえ……………171

歩け歩け にかわプロダクションとスター誕生

車椅子の市民権 何かすることないか

5 「利用」施設への道……………221

サービスの購入者 慢性病棟と死

ホームを選ばば 介護問題と女性

主要参考文献 269

あとがき 271



銀の園・ちちははの群像





## 1 老人と家族、その人間模様

### もつれた糸

春にしてはめずらしい長雨が続いていた。

行き交う車は、互いに飛沫をはね上げながら、それでもかなりのスピードで走っている。

『特別養護老人ホーム黎光園』の車も、激しくワイパーの音を響かせてその水しぶきの中を走っていた。入園希望者の事前面接を行なうために、老人の家庭を訪れるところである。

この事前面接は、新設ホームなどで開園と同時に五十人、百人と入園する場合は不可能だが、欠員が出て補充する際には多くの特別養護老人ホーム（以下特養ホームと略称する）で行なっている。

入園動機は老人によって様々、複雑な事情を抱えている場合もあるのだが、少なくとも、何故ホームを希望しているのか、それは老人自身の意志なのかを確かめると共に、入園に際して抱くであろう不安を少しでもやわらげ、ホームでの生活を説明することを目的としている。だが数多い特養ホームの中には、

「これから入ろうとする人よりも、今入っている人のお世話の方が大切です。そんなことに時間

をとられたくありませんね。来れば分ることです」

事前面接は、本人が直接見学に来て職員と話し合い、本人が決断するごく稀なケースを除けば、ほとんどが家庭訪問、多大の時間をとられることは必定。したがって、ホームの判断によって、行なわないところもないとは言えない。

黎光園では、よほどの遠方でない限り、生活指導員、看護婦、主任寮母の三者が出かけていく。

「これから会いに行くのはどんな方ですか」

私は、助手席に座っている秋野利夫生活指導員に訊ねた。

「福祉事務所から、こういう書類が来ています」

彼は振向いて、一枚の紙片を渡してよこした。

措置決定調書。

住所、氏名、生年月日、家族構成が書き込まれた、ごく簡単な経歴書であった。

「その最後のところを見て下さい。『昭和三十五年現住所に移動』それだけなんですよ。たとえば病歴とか、この二十年間のことが何も書かれていない。これじゃ見当のつけようがありませんね」

主任寮母の加東信子と、看護婦の中条満子が覗き込んだ。

「和田カツさんっていう方ですか。七十七歳ですね。子供は息子さんが二人。二人とも五十歳を過ぎていますね」

主任寮母と看護婦が眼でうなずきあっていたが、二人とも今一つ様子が分らないのは同じことだ。

「この書類はどこで作るんですか」

「入園の申込みは福祉事務所の方にしますから、そこで作るんですけど、もう少し詳しく調べ

て、病気の状況とか、身体の動く範囲なども書いておいてくれると助かるんですがね」

事前面接はこうした書類の不備を補う意味もある。家族に会って在宅での様子、たとえば好きな食物とか、趣味とか、最近の身体状況も確認することによって、園としての受け入れ態勢を整える必要もあろう。私は事前面接は必要不可欠のものだと思っている。

「入園の直接の申込み者は誰なんですか」

「次男なんです。長男は関西の方に居ますから、結局次男と暮らしていたんですよ。その次男夫婦ともどのくらいの期間一緒に暮らしていたのか分らないんですが、その次男が福祉事務所に行って申込みしているんです。福祉事務所からの電話では、物を食べようとしないうちで、非常に衰弱しているそうです」

「拒食なんですか」

中条看護婦が驚きの声をあげた。

「そうらしい、それで嫁さんがいろいろ苦労したらしくて倒れてしまったということなんですね」

「ひとくちに拒食と言っても、いろいろなケースがあるけど、原因は何なんですか」  
「さあ、その辺のところも行ってみないと分かりません」

車は、福祉事務所に立ち寄って、職員も一緒に行くことになったのだが、学校出たてのその若いおとなしそうな青年は、私を少々心細くさせた。

地図を頼りに車は裏道に入り、軒を接する住宅街の路地をいくつか曲った後、目指す家にとどりついた。

とりたてて立派でもない代り、貧相とも言えない、ごく普通の古い二階家であった。  
玄関を入るとすぐ板の間のダイニングルーム、その両脇に和室があるらしく、和田カツさんは

左手の部屋のベッドに寝ていた。六畳ほどの部屋で、枕元に大きく立派な仏壇が扉を開けており、果物やお菓子と共に大ぶりな花卉をつけた桜の小枝が供えられていた。

部屋の片隅には流し台が据えつけられ、そこでも簡単な水仕事が出来るようになっている。おそらく、カツさんが元気な頃は、台所を別にしていたのだろう。食べかけのヨーグルトやプリンが置いてあった。

陽は差していなかったが小さな庭の見渡せる南向きの静かな部屋である。カツさんは、心持ち右側の仏壇に顔を向けるようにして眠っていた。衰弱していると聞いていた割には頬がふっくらとしてつやつやしており、白髪もきれいに櫛が入れられている。

勤めを休んでいるという次男が応接に出て、話し始めた。

「じつは、母はこれまでずっと病院にいたんです。五年ぐらいいたと思うんですけど……、ところが一寸事情が変わりまして、一カ月ほど前に家に連れてきたんですが、それ以来すっかり弱ってしまいました……」

「まあ、病院に？ どこが悪かったんですか」

「それが……転びましてね。身体が動かなくなったもんで」  
「どちらの病院ですか」

病気のことは、看護婦の出番である。真剣な表情で中条さんが訊いた。  
彼は口ごもったまま、顔を伏せていたが、しばらくして、

「この近くの産婦人科の先生にお願いしまして」

「産婦人科？」

私達は思わず顔を見合わせた。

「どこも入院させてくれなかったものですから、しかたなくて……」

「じゃとくに、婦人科の病気ということではなくて？」

「……………」

秋野生活指導員は、一寸ためらっていたようだったが、

「こんなことをお伺いするのは失礼かもしれませんが、ここの奥さんと折り合いが悪かったんですか」

「いいえ、そんなことはありません」

彼は強い口調で言った。

「家内は近所でも評判なくらいよくしてくれました。風呂にもおぶって連れていき、母は大変な苦勞をかけたんですよ」

これまでの心痛の全てが凝縮されているような、細く弱々しい声であった。

おそらく、ホームの人間には言い得ない、また外部の者には想像し得ないたくさんの過去、修羅がそこにはあったことだろう。母親と妻との間に立って、双方から責められた日々もあり、この気の弱そうなおや、そして優しそうな夫、息子にとつてつらいことの積み重ねがあったに違いない。こうして妻をかばいながらも、心の中には波立っているものもまたあるようだった。

「入院したのが五年前としますと、それまではずっと一緒に暮らしていたんですか」

「いや、僕らと同居始めたのは、八年前からです」

「じゃ、それまでは？」

「母一人で暮らしていました。この家に住んでいまして、年をとったことだし、兄貴も関西ですから、私達が借家を引き払ってここに来たんです」

結局カッさんは、大まかに言って長い一人暮らしの末、息子夫婦と同居すること三年、その後五年間入院、そしてまた戻ってきて一カ月ということになる。

それにしても、転んで身体がきかなくなった時、入院先が産婦人科だったというのは、どういうことだろう。

中条看護婦が、少し改まった声で言った。

「それで、産婦人科の病院ではどのような生活だったんでしょうか」

「さあ、それは私には……一寸……家内に聞いてみませんと」

その時、私達は初めて奥さんの居ないことに気がついた。加東さんが言った。

「あの……奥さまは？」

「はい、心臓の持病がありまして、最近また具合が悪いもんですから休んでいます」

「それで、さきほど、事情があつて退院させたということですが、もしお差しつかえなかったら、聞かせて下さいませんか」

「あ、そのことですが、じつは、昨年の暮に、母のたった一人の姉が亡くなりまして、私たちそのこと隠しておいたんですが、何かのはずみで耳に入ってしまったんです。それがショックだったんですね。少しおかしくなってしまうたんです。姉がそこに来て立っているとか、昨晚来て話をしていったとか、周りの人にいろいろ言つたらしいんです」

「何かショックがあつた時に、幻聴や幻覚が起ることはありますけど、それだけの理由で退院させてしまうのも、どうなんでしょうね」

「でも、周りの妊婦さんたちが気味悪がつて」

「あ、そういう人達と一緒に部屋だったんですか。それじゃ妊婦さん達、どうしても産前産後は神経が高ぶりますからね、周りの人も恐いですわね」

「どうしても退院させてくれって言われまして、母は帰りたくないって言ったんですけど、連れて帰りました。伯母が亡くなってからというもの、母もすっかり氣落して、衰弱してしまつたん

です……本当に私も弱り切ってしまいました。家内は病気で寝込んでしまふし、私も勤めに出なくてはならないのに、出るに出来ない状態です……。会社勤めしている私の娘が時々休んではくれるんですが、それにも限度がありますし……」

加東さんが、ベッドのカツさんの側に寄っていった。

「和田さん、こんにち。聞えますか。黎光園から来ましたよ」

カツさんは微かに首をこちらに向けて、うなずいた。

「耳は聞えるようですね」

「ええ。でも、遠くなりました」

「それにしても、どうして食物を受けつけなくなったんでしょうか」

「それが……、毒が入っているというんです」

「毒が？」

思いもかけない言葉であった。驚きと同時に怖しさのようなものが四人の顔に走った。

「口の中が痛いらしいんです。舌が腫れてまして……。それで、家内が毒を食わしたと言いはじめたんです」

言いくさそうであった。しきりに眼頭をティッシュで押えながら、鼻をかんだ。私は思わず、見ではならないものを見てしまった思いで眼を伏せた。

カツさんが何か言いたそうにしている。唇が忙しく動くのだが、声にならない。

「えっ？ 何とおっしゃったんですか」

加東さんが耳を口の側に押しつけるようにした。

こういう時、私の耳は役に立たない。右耳の鼓膜に穴があいているせいもあるが、年寄りたちの発音不明瞭な言葉を聞きとるのは、これはもう立派な技術だといってよい。何度聞きかえして



も聞きとれなくて、私は「通訳」を他の寮母に頼まねばならないことが何度もあった。

加東さんが、唇の動きに合わせて、声を出した。

「ねえさんが」

うんうんというようにカツさんがうなずく。

「病気だなんて嘘言って」

「私をあまして（もてあまして）いる」

「どっかに連れていこうとしている」

私たちは再び顔を見合せて、沈黙した。

カツさんの口が再び動いた。今度は微かに聞こえる。

「私はもう長くはないと思っています。知っているんです。ここで死なせて下さい」

言いながら、両手をふとんから出して、胸のところで手を合わせた。

中条さんもカツさんの側に寄って、馴れた手さばきで、口の中を調べた。

「これは痛い筈ですよ。だから食べられないんですよ」

口内炎のようなものが出来ているらしい。

加東さんが耳もとで、大きな声で言った。

「お気持はよく分りますよ。でもね、お口の病気が治さないと、痛くて食べられないですね。食べないと元氣出ませんよ」

「いいえ、毒が入っているんです。だから痛くなるんです」

あるかなぎかの消え入るような声でありながら、そこには確固とした信念、他人の言葉には頑として動かない強いものがこめられていた。

毒が入っているから食べない——そこには生への強い願望がこめられている。にもかかわらず、